

松本清張記念館

◆館報◆
2000.8
第4号

私は小説家志望では なかつた。

昭和三十八年八月から翌三十九年一月まで「回想的自叙伝」というタイトルで『文藝』に連載。のち「半生の記」と改題。四十歳を過ぎて筆を執った松本清張がデビューまでの自己の前半生を語った数少ない作品。



写真:昭和41年(1966)10月初版 河出書房新社

現在入手できる本

「半生の記」新装版(河出書房新社)
松本清張全集(文藝春秋)
「半生の記」新潮文庫(新潮社)

作品紹介

松本清張は十五歳の時に、学業への思いを残しつつ就職する。それからは家族を養うために働き続けねばならず、小説家を夢見て文筆修行をするような余裕はなかった。

だが、この『半生の記』の行間からは、生活に追い立てられながらも独特の冷めたまなざしを持ち続けている、若き清張の姿が見えてくる。

学歴のなさから差別された時も、役人の横暴を目の当たりにした時も、清張は憤るよりも、むしろ冷静に自らの視線で観察することを忘れていない。

推理小説のみならず歴史にまで広く関心を持ち、膨大な著作を残した偉大な作家・松本清張を生み出す下地が、長い下積み時代にあったことを教えてくれる一冊である。

(学芸担当 小野 芳美)

目次

- 清張文学の根幹
インタビュー 小林安司……………2
- 紹介・松本清張研究会……………4
- 展示品紹介……………5
- 探検! 清張記念館……………5
- みんなの広場……………6
- お知らせ……………7
- 北九州文学マップ……………7
- トピックス……………8

インタビュー

清張を語る 「清張文学の根幹」

聞き手・大西 政寛・林 暁子
構成・林 暁子

少年時代の小倉の街

先生は清張さんより一学年下で、隣の小学校に通っていらつしやいました。当時の学校生活について教えてください。

そうですね、今思うと、あの頃は大正デモクラシーや自由教育の風潮がありまして、わりあい「綴方」(作文)なんかを盛んにやりました。模範文集を副読本で使った記憶がありますね。大正十年一月四日には、国語教育史上に残る芦田恵之助(当時、東京高等師範付属小学校 訓導)と友納友次郎(当時、小倉市 教育課長)の大論争(綴方の随意選題と課題の論争)が私の小学校(小倉市立米町小学校)でありました。そんなことの影響も確かにあったように思います。それから図画や音楽も盛んでした。あのころから(へ学芸発表会)などもするようになったんじゃないでしょうか。劇をやったりしましたからね。

そのころは、どんな本や雑誌が読まれていたのですか？

やはり『少年倶楽部』とか『日本少年』、『譚海』というのもありました。清張さんは『立川文庫』をよく読んだと言っています。私はあまり読まなかったですね。文学青年には昭和の初めに改造社から出た『円本』がよく読まれましたね。(円本時代)といってね。一冊一冊のこれは大人向けです。それから『キング』なんて雑誌もそれまでの大衆誌から群を抜いていました。

当時、小倉っ子の風情というのはどのようなものでしたか？

祇園祭なんかは子供から大人まで夢中になってやっていました。街のいたるところで、子供も青年もそろいの浴衣を着て、太鼓をどどど、どどど、叩いてね。あと、招魂祭というのがあって、その二つが街中あげて、小倉の大きな祭でした。

清張さんの記述には太鼓を叩いていたとかいっているのではありませんか。楽しい思い出だった

たら書きますよ。それどころじゃなかったんですね。一生懸命働いている両親を見て育った人だからなんでしょう。

清張との交流

私と清張さんとの接点は、戦後の小倉郷土会(※1)においてでした。昭和二十七年、小倉の森鷗外旧居の顕彰に森

於菟氏を小倉にお招きした時、囲む会の席で、私が於菟氏に清張さんを引き合わせたのが最初です。それまでも郷土会に参加していたようですが、格別話をしたということもありませんでした。とにかく無口で、重厚な人だったという印象があります。そのときも於菟さんから、「ああ、あなたが父のことを書いた人ですか」というようなことを言われておりましたが、それに対する清張さんの態度はひじょうに控えめなものでしたよ。「或る『小倉日記』伝」で芥川賞を受賞し



小林 安司 (こばやし やすし)

北九州大学名誉教授
前、北九州森鷗外記念会会長
松本清張記念館運営委員長
明治43年 小倉市(現北九州市小倉北区)生まれ

たとき、たしか横山白虹、劉寒吉、岩下俊作各氏が発起人になって、祝賀会を開きました。私も出席しましたが、そのときの清張氏も、決して浮かれた様子でもなく、むしろこれから自分はやつていけるんだらうかというようなことを挨拶で言っていました。芥川賞といつても、受賞してそのままあまり書かなくなってしまう人もいますからね。その点、清張さんはさすがに、地に足がついていると思えました。

小林先生が北九州市立中央図書館の初代館長をされていたとき、清張さんに著書の寄贈を依頼されたこともありましたね。

昭和五十年に、東京の「自宅に何ってお願いました。そしたら、自筆で寄贈目録を書いて下さいました。地区館の分までも考えて単行本や文庫本までたくさんいただいたんです。図書館では、現在でも清張文庫として市民に親しまれています。

清張文学とは

清張さんは自分でも働きながら、苦勞する両親の姿を見て育った。やはり、両親の影響はあると思うんです。お父さんは新聞をよく読んでいて、外部に興味を持っているひとだった。だから清張さんも一度は新聞記者を希望して、鎮西報の面接に行ったり、中山神社に記者を名乗って取材に行ったりしてましたね。社会派の小説なんかを書いたのも清張さんの特徴ですが、お父さんゆずりだと思えますね。また、お母さんもね、働きに働いた、一途な人だった。その粘着力のようなもの、清張さんにも言えるんじゃないですか。

「両親のことは「半生の記」などに書かれておりますけれども、私は、その影響についてもっとよい部分を見ていきたいと思っています。

清張さんは非常に多作な作家です。年譜(*2)によると芥川賞を受賞した

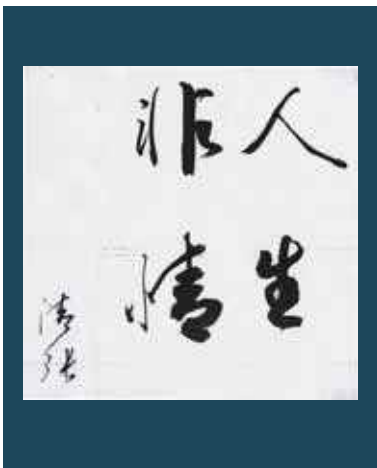
昭和二十八年にはほとんど毎月作品を発表しています。いくら芥川賞をとったからといってね、これだけ書かせてもらえないというのは、本人に書く力がないとありえませんか。

清張さんの文学を、亭亭とした大樹に例えると、こう、葉が茂って、枝も伸びているんです。その葉は「或る『小倉日記』伝」であったり、「昭和史発掘」であったり、古代史のものであったり、とにかくたくさんありますね。でもこの根が問題だと思っんです。私たちは枝や葉しか見ていない。でもこの木はしっかりと根を張っていますね。

その根というのは小倉時代と関係があるのでしょか？

根の半分くらいは小倉時代にあるんじゃないんでしょうか。世の中を甘く見ないというか、苦しい境遇で生活した人ですからね。ほかの地元の作家と、俺とは違うということも言っています。それどころじゃないんだと。孤独ですね。

清張さんがいよいよ東京に転勤することが決まって、有志の人たちと送別会をしたんです。その時私が雅帖に書いてもらったのが



これ、立派な字ですね。印刷屋で働いていた時分、布団の上に字を書いて練習したとありますけれども、さすがにうまいですね。書にも、清張さんの人生観が表れていると思います。

平成十二年六月十五日
松本清張記念館にて

(*1)
〈小倉郷土会〉は戦後昭和二十七年に活動を再開し、清張も早い時期から例会に出席している。間もなく上京したため、会に参加した期間は短い。『或る『小倉日記』伝』の要素の一つとして注目される。

記念館発行の『清張と鶴外』(平成十一年度企画展図録)や、『小倉郷土会と松本清張』(『松本清張研究』創刊号)に詳しい。

(*2)
昭和二十八年発表作品

- 梟抄——(別冊文藝春秋32号2)
 - 啾啾吟——(オール讀物3)
 - 戦国権謀——(別冊文藝春秋33号4)
 - 行雲の涯て——(オール讀物5、「三位入道」と改題)
 - 死神——(週刊朝日別冊・時代小説傑作集6、「青春の彷徨」と改題)
 - 英雄愚心——(別冊文藝春秋35号8)
 - 菊枕——(文藝春秋8)
 - 「静雲閣」覚書(週刊朝日別冊・中間讀物特集号9)
 - 権妻——(オール讀物9)
 - 火の記憶——(小説公園10)
 - 贖れつくり——(別冊文藝春秋37号12)
- 松本清張全集66巻(文藝春秋)年譜より

ふるさと小倉シリーズ④ 特別企画展

「清張文学の土壌」

平成12年 8月1日(火)~10月31日(火)
9:30~18:00 [入館は17:30まで]

企画展示室にて開催中

観覧料は常設展示観覧料に含まれます。

展示構成

1. 大正期の小倉
2. 清張の少年時代
3. 清張文学発生の「場」

「濁った暗い半生」と自ら語る清張の前半生だが、多感な少年時代を過ごした大正期は、大正ロマン、デモクラシーと謳われるように、大衆文化が花開く時代であった。

このような時代の雰囲気は小倉の街にも漂い、貧しさに苦勞しながらも清張は、その文化の中で豊かな文学的資質を蓄えていったに違いない。

旧小倉市制百年にもあたる本年、清張が少年時代を過ごした大正から昭和初めにかけての小倉を、当時の世相や町並み、文化から振り返るとともに、その頃の暮らしぶりについて同時代の人々の証言に触れながら、作家松本清張を生み出した土壌を探ってゆく。



紹介

松本清張研究会

平成十年末、松本清張記念館の開館を機に、「松本清張研究会」が発足しました。

平岡敏夫氏（筑波大学名誉教授）が代表理事をつとめられ、全国の大学等研究機関の研究者から個人の愛読者まで、多彩な会員が参加しています。

また清張生誕の地・小倉にも、「北九州松本清張研究会」が発足。赤塚正幸氏（北九州大学文学部教授）を代表に、北九州地域の研究者・学生が集い、地元ならではの研究を続けています。

記念館が両研究会の事務局をつとめ、活動をサポートしています。今後、記念館と研究会が互いに協力し活動することで、清張研究の一層の発展が期待されます。

両研究会とも定期的（前者は年一回、後者は年四回）に研究発表を行っています。ここでは最近の研究発表風景を紹介いたします。
（学芸担当 中川 里志）

北九州 松本清張研究会

平成12年度第1回研究発表

日時 平成12年6月17日

会場 松本清張記念館会議室

テーマ

『「或る『小倉日記』伝」をめぐる』

赤塚正幸（北九州大学文学部教授）



活発な意見交換が行われる会場



研究発表する赤塚 正幸代表

松本清張 研究会



講演する山田 有策氏



全国から35名が参加 熱気あふれる会場

第2回研究発表会

日時 平成12年6月10日

会場 立教大学7201教室

講演

『松本清張と絵画』

山田有策（東京学芸大学教授）

研究発表

『危機をめぐる連載小説—

菊池寛の「震災」から

松本清張の「戦後外交」へ』

前田 潤（立教大学大学院博士課程後期）

松本清張研究 創刊号発刊



1,500円

研究誌『松本清張研究』創刊号を発刊しました。特集「清張と鷗外」の他、研究論文や新資料紹介など内容充実。現在、記念館ミュージアムショップ等で販売中。

お問い合わせは

松本清張記念館内研究会事務局

（〇九三―五八二―二七六）へ

石版石



清張が版下工の修行のため半年間見習いをしていた
嶋井オフセット印刷所で、実際に使われていた石版石。

松本清張の職歴に「朝日新聞」の名を認めるとき、多くの人は記者という職種を連想するようです。現に新聞記者から作家になった例は多く、清張本人が敬愛した菊池寛(時事新報)や井上靖(毎日新聞)がそうであり、また司馬遼太郎(産経新聞)や佐野洋(読売新聞)なども有名でしょう。清張の作風はいかにも記者を連想させる(取材)の利いたものが多いのですが、本人は「新聞記者にあこがれを持っていた」(半生の記)にもかかわらず、学歴の壁に阻まれ記者になることはありませんでした。昭和三年、十九歳の時に清張は、印刷画工としての道を歩み始めます。そしてこの仕事で、その後わずかに形を変えながらも、ペンで一本立ちする直前までの職歴として二十九年間続きました。「朝日新聞」を退職した時の肩書は「広告部意匠係」だったのです。



第3回北九州商業美術連盟展覧会に出展した清張自作のポスター。戦後は商業デザイナーとして活躍した。

(学芸担当 林 暁子)

石版印刷の仕組みは、版画のリトグラフと同じで、石を彫ったり凹凸をつけて印刷するのではなく、水と油の反発作用を利用し、油脂性のもので書いた図案部分のみインクで転写させます。その作業には作図・印刷共に職人的技術が要されました。この実際の厳しい経験から、印刷という職業を巧みに用いた作品が数編生まれました。例えば「鬼畜」は、犯行の鍵を握る小道具として、石版石を登場させています。また「遠い接近」でも、色版画工が(文字をきれいに書く)特徴を、犯人特定の要素に生かしてあります。ほかにも印刷所をドラマの舞台として利用している作品に「連環」「二階」「天城越え」などが挙げられます。憧れながらも新聞記者になれなかった清張。しかし印刷画工として一家の生活を支えながら暮らした確かな実生活は、同時にジャーナリストの眼を持っていた彼を、広い読者層を得る作家たらしめたのです。

老よしとハルコの探検! 清張記念館

“1F 編集者インタビュー「松本清張の残像」”の巻

きよし この映像を見てて思ったんだけど、清張って、僕たち一般人のイメージする「小説家の先生」そのままの人だね。

ハルコ そうね。実際にそんな人がいたなんて驚いたわ。本当に小説を書くことが好きだったのね。

きよし 「書きたいことがありすぎて、時間が足りない」なんて、この人に言われたら、もう誰も言えないよね!「全力で駆け抜けた巨人」の称号はダテじゃない。

ハルコ でも思い出話とはいえ、当時の苦労を、楽しそうに話す編集者の笑顔が印象的。私たちは楽しく聞くことができたけど本当は大変なんでしょうね。



きよし 編集担当の奮闘ぶりが、清張のあれだけの仕事をささえていたのか。それとも、清張の強烈なエネルギーが、みんなを引っ張っていたのか…。

ハルコ 両方だと思うな。この二人三脚があったからこそ、今、こんなに多くの傑作が楽しめるんじゃないの。

きよし お互いに本当に信頼できる、固い絆だったんだろうね。僕たちも、そんな関係でいたいね。

ハルコ じゃ、私が清張役ってことで。

きよし ははは……。やっぱり?



◀編集者を正面に招き、清張は手前左にすわって原稿の受け渡しや打合せを行った。

杉並の清張宅の応接室で甦る大作家との思い出。清張一流の、題材へのこだわりと、編集者とのパートナーシップが、出版社6社・8人の口から語られます。当時打ち合せを行っていた応接セットは目の前に。あらためて見てみると、何かを語りかけてくるような気がしてきます。「松本清張の残像」は常設展示室2、1階出口手前です。(上映約15分)

「あなたの一番好きな清張作品は」

みんなの広場

「点と線」

中学生の時最初に読んで、とても面白く清張文学にハマったきっかけだった。

(女・福岡)

香椎駅周辺の学校だったので国鉄香椎駅と西鉄香椎駅を行ったり来たりして小説中の刑事気取りで散歩していた思い出がある。

(男・北九州市)

「砂の器」

それまで犯人＝悪人のイメージがあったが、そうではない。犯人にも人知れぬ悲しみ、秘密があるんだというのが強く印象に残った。「動機」これがこんなに切ないものとは思わなかったことを覚えている。

(女・福岡)

方言からの推理など非常に面白い。

(男・大阪)

「ゼロの焦点」

何度も愛読している。特に清張の作品には虐げられた者の恨みが深く静かに表現できていて味わい深い。

(女・大阪)

「影の地帯」

あまりにも感動したので舞台の柏原まで実際に行った。ナゾの女とナゾの組織がよい。

(男・横浜)

「北の詩人」

不幸な人間への愛情がある。しかし、それだけにおぼれていない。

(男・福岡)

「恋慕」

思慕を寄せていた女性に告白することもなく恋慕を募らせていく男のプラトニックな生涯、結末の描写が印象的。

(女・横浜)

集計Data (2000年5月まで)

1位	「点と線」	157票
2位	「砂の器」	77票
3位	「ゼロの焦点」	33票
4位	「昭和史発掘」	18票
5位	「張込み」	
	「或る『小倉日記』伝」	16票
7位	「けものみち」	
	「日本の黒い霧」	14票
9位	「霧の旗」	10票
10位	「球形の荒野」	
	「時間の習俗」	9票

8票 「黒革の手帖」

7票 「火の路」「西郷礼」

6票 「眼の壁」「西海道談綺」「黒い画集」

5票 「波の塔」「天城越え」「黒い福音」

4票 「顔」「迷走地図」「十万分の一の偶然」「半生の記」「黒地の絵」「砂漠の塩」

3票 「小説帝銀事件」「連環」「渡された場面」

2票 「天保図録」「死の発送」「風の息」「影の地帯」「黄色い風土」「Dの複合」「たづなつし」「かげろう絵図」「岡倉天心 その内なる敵」「蒼い描点」

1票 「北の詩人」「信玄戦旗」「恋情」「地方紙を買う女」「ミステリーの系譜」「神々の乱心」「古代史疑」「断碑」「詩城の旅びと」「父系の指」「赤い氷河期」「黒い手帖」「熱い網」「絢爛たる流離」「延命の負債」「1年半待て」「邪馬台国」「蒼ざめた礼服」「無宿人別帳」「黒の回廊」「遠くからの声」「小説 東京帝国大学」「遭難」「菊枕」「突風」「教の風景」「捜査圏外の条件」「網」「空の城」「深層海流」

ここが好き!

お便りをお寄せいただいた村田さん(福岡在住)は・・・

高校生の時に出会った「蒼い描点」が、心の中に強く残りました。若い頃から旅行好きで新聞記者にあこがれ、地図帳の中で旅をしていた私を、清張作品はいろんな所に連れていってくれたのです。

あの頃の私にとって、私自身が推原典子であり、まだ見ぬ恋人が崎野竜夫でした。この作品は、空想好きだった若かりし頃の私をなつかしく思い出させてくれる、青春の一冊です。一冊の本を10代、20代、30代、40代、そして今50代と読み返すたび、自分の置かれている生活環境でこうも感じる何かが違うんだということ、最近、つくづく思います。

♪思い出のつまったコメントありがとうございました。

村田さんには編集部からオリジナルグッズを送らせていただきます。

編集部より

皆さんに御記入いただいた作品名は、尽きることのない興味と創作活動で幅広いジャンルを手掛けた松本清張らしく69作品にのぼりました。清張文学の出発点である歴史・時代小説から評伝的小説、近現代史まであらゆるタイトルが並びましたが、一番票数を集めたのは現代・推理小説でした。やはり映像化された作品は強い印象を残すのでしょうか。清張原作の映画作品は35本、テレビ化されたものは100を越えています。

感想に目を移すと、票数とは関係なく、一つ一つの作品に対する熱い思いが伝わってきました。とてもすべて載せられず、お便りいただいた方には申し訳ありません。別表の1票、2票の作品も、読者の幸福な関係が見られました。

みなさん、まだ出会っていない作品はありませんでしたか? これからもいろんな感想をお待ちしています。

このコーナーではテーマをもとに集められたアンケート結果を発表します。第3回テーマは、

「あなたの一番好きな清張映画は」

出演俳優、見に行った時の思い出など、原作の出来以外の思い出も色々あることでしょう。今回はかなりちがった結果になるのでは? 楽しみにしています。

アンケートは館内にも置いています。お答えいただいた方の中から5名様記念館オリジナルグッズをさしあげます。

「みんなの広場」係まで

映画上映

- ・企画展で映像ホールを使用するため、映画上映はお休みさせていただきます。
- ・今後は、来館者アンケートの結果を参考にして人気作品の上映を行っていく予定です。
- ・まだまだアンケートは実施中。みなさんの声をどしどしお寄せください。

●お知らせ●

松本清張記念館 友の会 募集開始

会員の特典

- 常設展及び企画展へのご招待
- 松本清張記念館主催の事業の案内
- 本会主催事業の案内や本会会報の送付
- 松本清張記念館、広報誌（館報）の送付
- オリジナルグッズの進呈

会費

一般会員 …………… 3,000円
賛助会員 …………… 10,000円



主な事業

- 松本清張に関する講演会、シンポジウム等の開催
- 松本清張ゆかりの地並びに他都市の文学館見学事業の実施
- 松本清張作品に関する読書会、文芸講座等の開催
- 松本清張作品に関する映画ビデオ等の上映会の開催
- 会報の発行
- その他本会の目的達成のための事業

お問い合わせは記念館まで

読書室から

読書室に新刊本が入りました。ぜひ、ご利用下さい。

『文豪』

松本清張（文春文庫）

『文豪』待望の文庫化。逍遙、紅葉、鏡花、緑雨などの文豪に新たな光をあて、描いた、評伝的小説。



『松本清張のケルト紀行』

松本清張・佐原真／写真：飯田隆夫（NHK 出版）

1986年、巨石遺物やケルト文化を追ってヨーロッパに取材した清張を、同行した佐原氏が、飯田氏の写真などによって振り返るフォトドキュメント。

『輪(RINKAI)廻』

明野照葉（文藝春秋）

第7回 松本清張賞受賞作品。新宿、新大久保、新潟そして茨城で起きた、3代にわたる怨念の復讐劇。清張賞初のホラー作品。

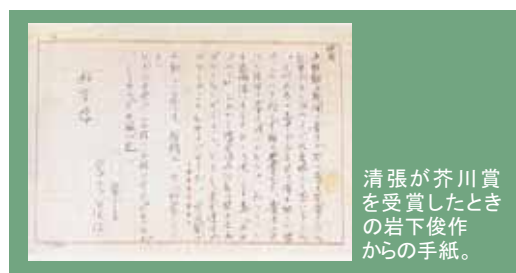
松本清張賞とは～

（財）日本文学振興会の主催により、松本清張の多大な業績を記念して、エンターテインメントの分野での雄渾な才能を発掘育成することを目的に作られました。

これまでの受賞作品

- 第1回（平6） 葉治 英哉『怪物見隊顔末』
- 第3回（平8） 森福 都『長安牡丹花異聞』
- 第4回（平9） 村雨 貞郎『マリ子の肖像』
- 第5回（平10） 横山 秀夫『陰の季節』
- 第6回（平11） 島村 匠『芳年冥府彷徨』

※以上の作品は読書室でご覧いただけます（第2回は該当作なし）



清張が芥川賞を受賞したときの岩下俊作からの手紙。

共に天神島尋常小学校の卒業生であるこの二人に共通する少年時代の思い出に、「鉄道馬車」と「立川文庫」がある。

いの手紙が大切に保存されている。

市立商工貿易会館の横に『無法松の碑』がある。

天神島尋常小学校跡地に建てられた

太鼓を全国に一層広めた。

『富島松五郎傳』は直木賞候補になる

こと二回、「無法松の一生」というタイト

ルで何度も劇化、映画化され、小倉祇園

さとしてあろう。

清張は教科書の下にかくして併読し、岩

下は同級生らと自分の部屋で寝そべり

ながら読みふけたという。多感な少年

時代の思い出の蓄積が二人の文学のふる

さとしてあろう。

文庫」は当時流行していた講談読み物。

清張は教科書の下にかくして併読し、岩

下は同級生らと自分の部屋で寝そべり

ながら読みふけたという。多感な少年

時代の思い出の蓄積が二人の文学のふる

さとしてあろう。

期にかけての小倉を舞台にした名作で

ある。作者、岩下俊作（本名：八田秀吉

九〇六年～一九八〇年）は、大正五年、

小学四年生の時、天神島尋常小学校に

転校してきた。弟の一造は松本清張と同

級生であった。清張は「西郷札」が週刊

朝日に入選した頃、小説の習作の批評が

欲しくて、同級生の兄という縁で岩下俊

作を訪ねた。勤め帰りにもかかわらず岩

北九州文学マップ

無法松のころの思い出―岩下俊作

第2回 松本清張研究奨励事業 入選者決定!

松本清張研究奨励事業の第2回の募集に、ジャンルを越えて幅広く活躍した清張にふさわしく、文学、現代史、古代史、国際政治など多彩な研究企画案が、全国から15点集まりました。

選考委員会(委員長:平岡敏夫筑波大学名誉教授、委員:山田有策東京学芸大学教授、藤井淑禎立教大学教授、藤井康栄当館館長)による厳正なる選考の結果、次のとおり入選者(団体)が選ばれました。

8月4日より、記念館地下オープンスペースにて「研究奨励金贈呈式」を行いました。

企画名	「清張におけるアメリカGHQ と日本、そして『朝鮮』の配置図について」(共同研究)
入選者(団体)	九州大学大学院比較社会文化研究科3名 代表 趙正民(九州大学大学院博士後期課程)
奨励金	75万円
企画名	「初期清張の学習—短編小説の構築と『週刊朝日』の存在—」
入選者	山口政幸(専修大学文学部助教授)
奨励金	25万円

(敬称略)



第3回 松本清張研究奨励事業 研究企画募集中

時代を見つめ続けた松本清張の文学を研究することは、今後の時代の進むべき方向性と私たちの生きていく指針を見出すことにもつながります。

このような視点から、清張の作品や人物像についての研究活動を推進し、歴史や社会の事象の深層を追究する精神を継承していくため、松本清張夫人ナヲ様のご厚意をもとに創設しました。

● 対象

ジャンルを問わず、松本清張の作品や人物像を研究する活動や、松本清張の精神を継承する創造的かつ斬新な活動(調査、研究等)で、これから行おうとするもの。

年齢、性別、国籍は問いません。ただし、未発表に限りません。個人または団体も可。

● 内容

入選者(団体)に200万円を上限とする研究奨励金を支給します。金額は企画内容を検討して決定します。

● 応募規定

今後取り組みたい調査・研究テーマ等の内容がわかる企画書、予算書など(様式は自由。ただし日本語)を、平成13年3月31日までに応募してください。

● 選考

松本清張記念館内の選考委員会により選考します。

● 発表

審査終了後、審査結果を直接通知します(6月末頃)。なお、入選者には開館記念日(8月4日)に、北九州市で贈呈式を行います。

● その他

採用された企画は翌年の6月末までに実施成果を報告していただきます。また、成果品である研究論文、報告書等は記念館刊行の研究誌に掲載、発表することがあります。成果品にかかる著作権等諸権利は、北九州市に帰属します。

● お問い合わせ

松本清張記念館 TEL093-582-2761

● 編集後記 ●

開館してはや2年、企画展の開催も4回目となりました。お寄せいただいたご意見をとり入れながら、さまざまな事業を展開しております。今後とも、声をお寄せください。

(大西 政寛)

編集・発行

松本清張記念館

〒803-0813
北九州市小倉北区城内2番3号
TEL 093(582)2761
FAX 093(562)2303
<http://www.kid.ne.jp/seicho>
制作 (有)エディックス



イラスト:山藤 章二

- 開館時間 午前9:30～午後6:00(入館は午後5:30まで)
- 休館日 年末(12月29日～12月31日)
- 観覧料 一般/500円(400円) 中・高生/300円(240円)
小学生/200円(160円) ()は30人以上の団体
- アクセス J R:小倉駅から徒歩15分 西小倉駅から徒歩5分
バス:小倉北警察署前/NHK前下車
車:北九州都市高速、大手町ランプより5分

